

思い出すこと

丹下和彦

岡先生に初めてお会いしたのは、62年10月からの「エウテュプロン」講読の時間でであった。ギリシア語初級文法を担当していただいていた松永助手(当時)が都合で後期から担当できなくなり、当時同志社に勤めておられた岡先生が出講されてきたのである。ドイツから帰国されて程ない頃で、少壮気鋭という印象が強かった。その後私は松平門下の中村先生や松本先生らからも教えを受けることになるが、その教室外の座談の場で耳を傾けていると、これら松平門第1次グループとでも言うべき諸先輩のあいだでの岡先生の位置は、まさに“秀才の末弟”という感じであった。

先の「エウテュプロン」を読み上げた学期末、卒論の相談に乗っていただいたことがある。いまはもうなくなった百万遍門北の小さな喫茶店でエウリピデスをやりたいと申し上げると、即座に G.Murray の "Euripides and his Age" は読んだかと反問された。

京大へ出講されたのはこの時だけではなかったか。助教授に就任されて京大へ戻って来られたのは69年であるが、この年は紛争で授業どころではなかった。年も押し詰まった授業再開の頃は、私は翌年から和歌山へ赴任することがほぼ決まって、ばたばたしていて、結局授業を受けることはできなかった。その後さまざまな時と場で先生から受けた教えは量り知れないほどあるが、教室に座って授業という形で教えていただいたのは「エウテュプロン」講読だけだったことになる。

74年、私がテュービンゲンへ行くことになったとき、テュービンゲンの先輩である先生は数々の助言をくださった。私はそれを十分に生かしたとは言えない。先生の師シャーデワルト博士はもう引退していたが、たとえ現役であったとしても、怠惰で劣等な私には博士と先生のような美しい師弟関係を結ぶことは、とてとてもできはしなかったろう。

77年に先生はマインツへ客員教授として出張される。その年末、私は旅行でドイツへ行き、マインツ大学を訪れたが、先生はクリスマス休暇でコンスタントに行かれてお留守であった。研究室のドアに、戯れに *veni, vidi...* と書いた

紙切れを挟んで来たことを思い出す。

先日、書架の本をめくっていると、先生からの絵葉書が出てきた。84年当時マドリードに滞在していた私宛のもので、その頃セネカを読んでいた私が F. Leo のテキストが京大にあるか否か問い合わせたのに返事をくださったものである。その風貌を髭髯とさせる瀟洒な字体がなつかしい。

12月末の研究会によく出席していた頃、会後の二次会も果てたのち、大阪方面へ帰る先生と橋本さんと3人で京都駅でなおビールを買い込み、高槻までの短い時間お付き合いを強要し、車内で缶を開けたものであった。先生も少し酔っていたから、何も言わず付き合い合ってくださいたのかもしれない。

94年、先生は京大を定年退官された。その記念パーティの席上、挨拶を求められた私は先生に、今後お齡は召されても"枯れる"などということは決してないようと、言わずもがなのことを生意気にも申し上げた。杞憂であった。書かれるものの論鋒はますます鋭かった。最後のお仕事となった『オイディプス王』論で、せっかく議論の場に招んでいただきながら、充分にお応えすることができなかつた。忸怩たる思い、切である。

(2000年10月26日記)